

# 足島におけるウトウの標識調査

竹丸勝朗・山田洋治郎・小室智幸・鈴木一博・小松哲文

足島は宮城県牡鹿郡女川港から東に約14km、牡鹿半島先端にある金華山の北約10kmに位置する無人島で、昭和33年「陸前江島ウミネコ・ウトウの繁殖地」として国の天然記念物に指定されている。昭和46年(1971)環境庁発足によって翌47年から始まった鳥類標識調査であるが、同48年(1973)から足島でも標識調査が開始された。これまでの32年間に協力いただいた方28人、延べ170人によって調査された記録である。

ウトウの総放鳥数10,590羽、内訳は新放鳥数8,377羽、再放鳥数2,213羽である。年毎の新放鳥数は昭和58年(1983)の894羽をピークに急激に減少し、平成4年(1992)は169羽と最高羽数放鳥時の19%弱まで激減したのである。当時日本中の海鳥は激減の途についており、特に天売島のウミガラスは平成7年(1995)には20羽まで減少し絶滅寸前となり、多くの海鳥関係者を憂いさせていた。その大きな原因はサケマス流し網等による海鳥の混獲と推定されていた。平成5年(1993)母船式サケ・マス漁の公海での流し網が禁止になってから海鳥の個体数は徐々に回復してきているように思っているが、足島のウトウの個体数は減少したまま横ばいの状態と思われ、新放鳥数はここ5年ほぼ同じである。

足島で放鳥したウトウの回収記録は殆どが魚網による混獲であり、島の周辺や仙台湾および福島県沖で32例ある。また茨城県沖で2例、遠方では島根県沖、根室沖でそれぞれ1例ある。さらに国外で回収されたのはサハリンで2例あった。また、天売島で放鳥され足島でリカバリされたのは6例あったがこの逆は今のところない。福島県沖で回収されたものに水深30m~39mに設置された刺し網で混獲されたことが報告され、ウトウの行動生態を知るうえで興味深い。

足島でリターンとして記録された過去10年分を分析すると総リターン数676羽のうち1年目回収は168羽で最も多く、2年目が73羽、3年目以降徐々に減少し5年目から15年目頃まで20羽代と16年目頃から20年目10羽代、21年目頃からは急に減少して3羽以下になっている。今年回収の個体に32年目が1羽あったことは注目したい。これらの個体は毎年回収されるのではなく、1、2回が普通で多くとも3ないし4回であり、連続することはなく飛び飛びの記録である。今後の詳細な解析が必要と思われる。

今年の調査で放鳥後32年目の1羽を回収したがこの年、昭和48年(1973)は足島で最初に標識調査をした年で216羽に標識したうちの1羽であった。当時使用していたリングの材質はモネル(ニッケル/銅合金)であり、22年以上経過すると磨耗が進み、刻印の判読が困難になってくる。昭和62年(1987)から磨耗が少ないインコロイ(ニッケル/クロム合金)のリングを使用している。

私たちはウトウの生存年数はよく解からないが32年以上生存する個体もあることは確かとなった。今年32年前の個体が回収されたことは、今年放鳥した243羽のどれかが32年後に回収される可能性があることでもあり、今後も継続して標識調査をすることがウトウの保護にも役立つものと思い調査メンバーは後継者の育成を求めながら来年以降も継続したいと頑張っているところである。